

書評

PT・OT入門 イラストでわかる評価学 上杉雅之(監修), 西守 隆(編集)

B5判・340頁・2色刷
定価: 4,800円+税
医歯薬出版刊, 2020年



学習者の成長に寄り添う書

〔評者〕堀本ゆかり 国際医療福祉大学 福岡保健医療学部 理学療法学科
国際医療福祉大学大学院 理学療法学分野/医療福祉教育・管理学分野

リハビリテーション専門職がまず身に着けるべき臨床能力は、評価、分析、推論、治療技術である。私が入職した1987(昭和62)年当時は、『リハビリテーション医学全書5 測定と評価』(医歯薬出版)、現在の第10版よりはるかに薄い『徒手筋力検査法』(協同医学出版社)などが手許にあるくらいで、ようやく翻訳書が出回り始めた時期である。入職とともに十数名の患者さんを担当したが、自己学習をしようにも情報通信技術(ICT)も書物も十分でなく、先輩理学療法士の助言・指導を乞う毎日であった。対応不足や治療の進捗が滞ると容赦なく叱責された。一人前と認めてもらうために日々繰り返し鍛錬こそが、評価眼と介入スキルを得る唯一の方法であった。

その当時はリハビリテーション科専門医が少なく、全国から見学に訪れる若い医師に対して、先輩理学療法士や作業療法士が、評価、治療、補装具などの研修会を行っていた。本来であれば指示を乞うべき医師に対して研修を行う先輩たちの姿はとても誇らしく、いつかは自分もそんな立場になりたいと士気を高めた。憧れそのものであった。

評価学の書籍は、教授者側と学習者側の双方の視点が必要であり、教えやすいことと理解しやすいことがポイントである。本書には、現代の学習者が学びやすいしかけが段階的に盛り込まれており、全章を通して、国家試験に必要な内容(「エッセンス」「確認してみよう」と臨床的着眼点(「先輩からのアドバイス」)から発展的に思考できる構成になっている。評価学は、知識として得たものを臨床で手技として標準的に発揮することが求められる。知識の定着面では、国家試験を意識した重要キーワードが赤字で示されているため、検査や測定の目的や視点が確認しやすい。技術面では、関節運動方向を示すガイド矢印に参考可動域が記載されており、実習しながら瞬時に確認ができる。さらに、徒手筋力検査や感覚検査では、患者へのオリエンテーションの文言が示されている。この科目を教授する難しさのひとつに、他人の体に触れ、語りかけることに苦手意識を感じている学習者への支援がある。学習者の特性や学習の視点に合わせた上記の工夫は、教授者の困難感を支援し、学習者の苦手意識克服を後押しするような神髄として随

所に盛り込まれている。

2020年から本格的に導入が加速する診療参加型臨床実習は、先輩理学療法士・作業療法士の臨床を見学・模倣することによって、技術力の向上と問題解決型の思考を身に着ける手法である。実習中の課題や疑問を解決するテキストがあれば、空き時間にも簡単に振り返ることができよう。本書に記載された技術・思考・語りは発展性をもって、即座に臨床に収束していくのである。時代ごとに方法論のトレンドはあろうが、学習者が一人前になるという目的をめぐし、繰り返し思考し鍛錬する姿勢は変わらない。評価学の書籍は常に彼らの傍らにあり、その成長を見守り続けるであろう。

本書が、学習者の手を離れるときは、専門職としてひとり立ちのとき。そして次に手にするのは、後進の教育に向かうときである。1冊の書籍を通して、臨床に必要な知識と技能、専門職としての志は伝承されていく。評価学の書籍は、長い時代を経て学習者の成長に寄り添うものであってほしい。そして、本書が今後も多くのリハビリテーション専門職の礎となる存在であり続けることを願ってやまない。